



第16号 平成26年3月

かんぼ 環保センターだより

発行：岡山県環境保健センター

〒701-0298 岡山市南区内尾739-1

TEL:086-298-2681 FAX:086-298-2088

URL <http://www.pref.okayama.jp/soshiki/185/>

目次 最近の話題をご紹介します・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1～4

最近の話題をご紹介します

はじめに

岡山県環境保健センターは、環境保全及び保健衛生に関する「試験検査」、「調査研究」、「研修指導」、「情報の収集・解析・提供」の役割を担い、県民の安全な生活を科学的に支える総合的な研究機関として、地域に密着した業務を推進しています。また、新たな感染症の発生や環境汚染物質、残留農薬など、当センターで実施する検査・調査研究は時代や環境の変化に合わせ、迅速かつ的確に実施できるよう日々努力しています。

こうしたセンターの業務について、最近の話題をご紹介します。

ウイルス科

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）の発生

SFTSは、2011年に中国で特定された新しいウイルスによる感染症です。ヒトは、SFTSウイルスを保有するマダニに咬まれることで感染します。発症すると、発熱、消化器症状などが現れ、血小板や白血球が減少し、重症の場合は死に至ることもあります。日本では平成25年1月、山口県で国内初めての症例が報告されました。

岡山県では、平成25年7月、県内で初めてとなるSFTS患者が確認されました。SFTSの診断は、患者検体からウイルスの遺伝子を検出することによって行われます。SFTSが疑われる場合には、まずセンターで検査し、陽性の場合にはさらに国立感染症研究所で詳細な検査が行われて確定しています。

SFTSウイルスを媒介するマダニは、春から秋（3～11月）にかけて活動が活発になります。すべてのマダニがSFTSウイルスを持っているわけではありませんが、レジャーや作業で野山に立ち入る時は肌の露出を少なくするなど、マダニから身を守る対策が重要です。

現在、センターでは、県内各地でマダニを捕獲し、種類や分布状況、SFTSウイルス保有状況の実態について調査しています。



フタトゲチマダニ

細菌科

レジオネラ症の調査

レジオネラ症は、レジオネラ・ニューモフィラを代表とするレジオネラ属菌という細菌に感染することにより発症します。劇症型のレジオネラ肺炎と一過性の発熱を症状としたポンティアック熱に分類され、患者の多くは中高年の男性です。

レジオネラはもともと土壌や川、湖など環境中に広く生息している菌ですが、人は主にレジオネラに汚染された水を吸い込むことで感染します。最近では、循環式浴槽やジャグジー風呂、噴水、加湿器などにより発生したエアロゾル（水の微細な粒子）の吸引による感染や、多くの人が利用する公衆浴場や空調設備などでの集団感染も報告されており、その感染源の究明が極めて重要になってきます。

センターでは、感染源の原因究明や環境中での分布を把握する目的で平成19年から調査を行っています。その中で、患者の喀痰から*L.pneumophila* 血清群 3 ST93という型のレジオネラが検出されました。このタイプは現在のところ岡山県以外では検出されていない型で、感染源の究明が急がれており、今後も菌や患者の疫学情報の収集、環境調査を合わせた詳細な調査を行っています。

衛生化学科

「違法ドラッグ」の検査

最近、「違法ドラッグ」と称される製品の乱用による健康被害が全国的に拡大し、重大事故を起こすなど、大きな社会問題になっています。

違法ドラッグとは、「脱法ドラッグ」、「脱法ハーブ」などと称して、多幸感や快感を高めたり、幻覚作用等を得ることを目的として販売されている製品をいい、体に有害な成分を含むものが多く、非常に危険です。県内では平成25年2月上旬、違法ドラッグを吸引し意識がもうろうとした運転手が自動車を運転し、衝突事故を起こすなど第三者を巻き込む事件が発生しています。



販売されていた製品

県では、このような違法な製品を市場から排除し、県民の健康被害を未然に防止するため、平成25年度から買上検査を実施し、含有成分を特定しています。センターでは含有成分を分析・特定するため、国や全国の地方衛生研究所と協力し、さらなる体制作りを進め、県民が安全・安心な生活を送れるよう努めています。

水質科

農薬による魚のへい死事例

毎年、河川などの公共用水域において魚のへい死や油の漏洩等が発生していますが、センターでは迅速な水質分析を実施し、原因究明に努めています。

平成25年9月、県東部の小河川で1千匹近い魚が死んでいるのが見つかりました。センターでの水質検査の結果、殺虫剤の「エンドリン」が1リットル当たり0.12~0.48 μ g検出されました。「エンドリン」は1975年に使用禁止となった魚毒性が強い農薬で、魚の半数致死濃度を超過して検出されたことから、県ではこの農薬による魚の大量死の可能性が高いと推定し、その旨を公表しました。

なお、翌日の水質検査ではエンドリン濃度が検出下限値未満まで低下したことを確認しました。

大気科

PM2.5 常時監視

センターでは平成25年2月18日から、これまでの大気汚染物質に加え、微小粒子状物質（PM2.5）について観測データをホームページ上にリアルタイムで掲載するシステムを整え、県民の方への情報提供を始めました（図1）。

PM2.5は、車の排気ガスや工場の煙などに含まれる、おおむね直径2.5 μ m以下の粒子です（1 μ mは千分の1mm）。非常に小さいため、肺の奥深くまで入りやすく、肺がんのリスクの上昇、呼吸器系疾患への影響、循環器系への影響が心配されています。岡山県では日平均値が国の示した暫定的な指針値（70 μ g/m³）を超えると予想される場合に注意喚起を行うこととし、平成26年3月現在、県内17地点（岡山市及び倉敷市を含む。）の1時間値を公表し、大気の状態をお知らせしています。

センターでは今後PM2.5の成分分析を行うなどにより、汚染原因の推定や注意喚起に資する基礎データの収集を行っていく予定です。



図1 岡山県の大気環境の状況ホームページ

放射能科

県内環境放射能の調査

センターでは一般環境中の放射性物質の濃度の変化を監視（モニタリング調査）しており、東日本大震災による東京電力(株)福島第一原子力発電所の事故直後は原発事故由来と考えられる人工放射性核種が極微量検出されましたが、人体への影響は認められないレベルでした。

また、平成24年度から県内の平常時における環境放射能の調査を開始しました。空間 γ 線線量率は地域差があり、火山灰土壌の地域では低く、花崗岩などが分布する地域では高い傾向であると言われており、県内12箇所で行った結果、同様の傾向であることが分かりました。

さらに、土壌・河川水の放射性核種濃度測定結果からは、全ての地点でセシウム134（半減期約2年）は検出されず、県内で原発事故による放射性物質の蓄積等の影響は認められませんでした。

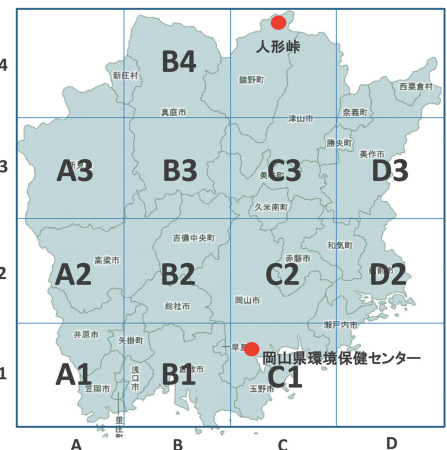


図2 県内環境放射能の調査区割り

感染症情報センター

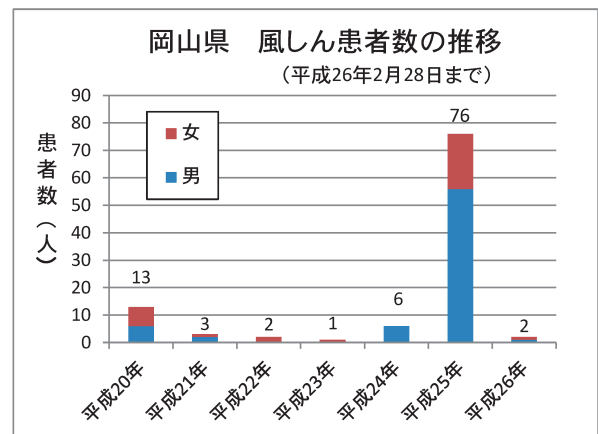
風しんの増加

平成25年は前年に引き続き、風しんが関東・近畿地方を中心に全国規模で拡大しました。この流行はかつての流行と異なり、患者の多くは成人の男女でした。定期予防接種の機会がなかった成人男性または定期予防接種の接種率が低かった成人男女を中心に患者が増加しました。そのため、職場等での感染事例が相次ぐなど、社会的に与える影響が大きくなりました。

県内でも平成20年の全数報告調査開始以来最も多い76名（過去5年平均患者数 年5名）の患者報告がありました。患者は男性56名、女性20名で、男性は20～40代、女性は20代～30代が中心でした。

風しんの一番の問題は、妊娠した女性（とくに妊娠20週頃まで）が風しんにかかると、産まれてくる赤ちゃんに心臓病や白内障、難聴を特徴とする「先天性風しん症候群」が生じる可能性があることです。

風しんは予防接種で防ぐことができます。予防接種を受ける場合、麻しん対策も考慮して、麻しん風しん混合ワクチンの接種が勧められています。



岡山県 風しん患者数の推移

企画情報室

公開講座の開催

センターでは、最近の話題、トピックス、センターで行っている検査や調査内容を広く知っていただくために、一般の方々を対象とした公開講座の開催を始めました。平成25年は、「東日本大震災から学ぶ」、「岡山県の大気環境の現状」、「知って安心 食物アレルギー」、「そのせき大丈夫」といった内容で、追加開催も含め計5回開催することができました。

この講座は、外部から招いた講師により概要を講演していただき、センター職員が検査・調査から得られた情報を解説するというもので、どの回も好評をいただき、引き続き定期的開催してまいります。

今後も県民のみなさまのニーズにあった内容で公開講座を開催したいと考えています。講座の開催については当センターのホームページをご覧ください。みなさんで環境や保健に関する話題を、一緒に勉強し、考えてみませんか。



1月26日 県立図書館連携講座